安全安心な生活支援を入院前から行うケア提供システムの構築
―入院前準備教室に参加後、入院予定病棟につなぐシステム―

施設名　金沢大学附属病院　　氏名　小川外志江

【概要】

昨年度は患者が高度な治療を受ける入院前後でＱＯＬを維持し社会復帰できるよう、これまで入院してから実施していたケアを入院前から行う目的で入院前準備教室（以下教室とする）を創設した。教室は集団指導として実施しており、今年度は、個別的なニーズを満たすために、教室に参加後、入院予定病棟につなぐシステムを新たに整え、患者のニーズを満たし、その患者に応じた看護を入院前から行うこと、また教室のさらなる改善を目指し活動した。教室参加後に、入院予定病棟でケアを実践する病棟として、外科系4病棟の選定、病棟で行うケアを明文化し、入院前からのケアを開始した。ケア内容は、病棟案内や患者の気がかりを聴く、入院基礎情報を得る、入院を担当する看護師の紹介、手術パスの説明など、各病棟で患者のニーズにそって実施した。また教室内容も見直し、患者のニーズや利益にそった内容を検討し、昨年度より指導内容を4項目増やし、11項目とした。教室に参加した患者は469名（平成30年1月末）、病棟でも入院準備に向けたケアを実施できた患者は56名であった。病棟での入院準備に向けたケアは入院生活そのものや、入院までの気がかりが解消されることにつながっていた。一方看護師も、入院に当たっての患者情報を得て、入院前から患者状況を知ることで、患者の望みや状態に応じた入院準備を整えることにつながっていた。

【背景】

大学病院として、侵襲度が高い手術・治療が行われる中、高齢者や認知機能が低下した患者の増加もあり、せん妄の発症や転倒などで入院期間が遷延する事例が見られている。患者が高度な治療を受ける入院前後でＱＯＬを維持し社会復帰できることは患者にとって重要である。昨年度は、適切なタイミングで、患者の入院中や退院後の生活を見据えた入院前からの看護を行うことが必要であると考え、これまで入院してから実施していたケアを入院前から行う目的で入院前準備教室（以下教室とする）を創設し、プロジェクトリーダーとしてメンバーと共に活動した。教室は、平日毎日 3 回、12 時、13 時、14 時に 20 分程度の時間で開催し、入院が決定し希望する患者が、参加できる時間帯を選んで参加している。内容は、深呼吸、口腔ケア、転倒予防、せん妄予防、禁酒・禁煙、相談窓口についてなどであり、深呼吸や転倒予防のロコモ体操等体験も含め、7 項目について実施している。また、相談があれば、療養相談室、歯科など各種相談窓口にもつないでいる。教室は患者から肯定的にとらえられており、入院中の有害事象の減少と適切な在院日数での退院にも役立ったと考えている。教室は集団指導として実施しており、入院する病棟や疾患についての質問、不安がとても大きい患者など、個別的なニーズを満たすまでには至っていなかった。そこで、プロジェクトリーダーとして新たなメンバーも加え、教室に参加後、入院予定病棟につなぐシステムを新たに整え、患者のニーズを満たし、その患者に応じた看護を入院前から行うことを目指した。

【実践計画】

１）教室参加後にケアを実践する病棟を募り、メンバーを選定し定期的に会議を実施する
２）プロジェクトメンバーは教室に参加し、病棟で行う入院前ケアの明文化、業務調整を行い、教室参加後の患者を受け入れる体制を整え実施する
３）教室の対象者に応じた教室内容の検討を行い、手順書、パンフレットの改定を行う
４）プロジェクト会議で、次の活動のヒントを得られるよう各病棟の事例を報告、共有する
５）教室参加後に、入院予定病棟でケアを受けた患者に教室や入院予定病棟でのケアについて感想を伺い、評価する
６）教室参加患者の入院時の有害事象の評価を行う

【結果】

教室参加後に、入院予定病棟でケアを実践する病棟として、外科系の4病棟を決定した。看護師長か副看護師長1名ずつメンバーとなり、教室運営会議を計19回開催した。患者のニーズにそって教室の午前開催を検討し、12時、13時、14時開催に加えて、木曜日の11時開催を増やすことができた。また、患者のニーズや利益にそった内容を検討し、昨年度より指導内容を4項目増やし、11項目とした。教室に参加した患者は469名（平成30年1月末）で昨年度の同時期の443名に比べて増加した。参加者の年齢は40～50歳代が30.5％（昨年度32.9％）で多く、70歳代が25.2％（昨年度19.3％）であった。続いて60歳代が24.5％(昨年度28.9％)、20～30歳代が10.9％(昨年度11.9％)、80歳以上は7.5％（昨年度6.5％）であった。昨年度より、70代以上の参加が増加した。教室でせん妄やその予防について説明したことで、せん妄予防に役立つ持参物品として入院時カレンダーの持参率は15.4％、時計持参率は52.5％、趣味の本持参率23.9％であり、昨年度よりすべてにおいて上昇した。有害事象として、せん妄は教室に参加した患者の内、6名が発症した。発生率は1.9％であり、院内全体の発生率2.1％より低かった。発症は60代1名、70代4名、80代1名であった。転倒予防については、可能な患者と共に実際に転倒予防ロコモ体操を行った。教室に参加した患者の内6名が転倒したが、処置を必要としない状態で、患者のＡＤＬには影響がなかった。せん妄発症患者、転倒した患者の内3名が同じ患者であった。ロコモ体操の実施率は32.7％（昨年度16.7％）であった。教室参加後に入院予定病棟へ案内し、病棟でも入院準備に向けたケアを実施できた患者は56名であった。外科系の4病棟で、教室参加後に病棟案内や患者の気がかりを聴く、入院基礎情報を得る、入院を担当する看護師の紹介、手術パスの説明など、各病棟で患者のニーズにそったケアを実施した。

【評価及び今後の課題】

教室参加後に入院予定病棟へ案内し、病棟でも入院準備に向けたケアを実施できた患者は 56 名で、全員に病棟案内を実施した。そして、看護基礎情報を収集し、患者の全体像の把握、看護師の紹介、入院にあたっての気がかり、手術のパス説明やストーマの説明など行った。患者のニーズとして「病棟の雰囲気を知りたい」「病室やアメニティ、食事、入浴、トイレ等日常生活について知りたい」「洗濯できる場所の確認。術後、いつ頃から入浴できるか」など病棟、病室を見て入院生活をイメージしたいというニーズが多かった。ケア後の患者からの反応・感想は「入院のイメージできた。手術当日の流れがわかった」「部屋にトイレがついているのでよかった。お風呂も車イスでつれてきてもらえば自分で入れそう」「入院前に部屋も歩行器も見る事、試すができ、安心した」など入院生活そのものや、入院までの気がかりが解消されることにつながっていた。一方看護師も、患者の「歩行状態を観察」し、「デイルーム・ナースセンターに近い部屋でトイレに近い位置のベッドを準備し、歩行状況の情報共有した」など患者情報を得て、入院前から患者の状況を知ることで、患者の望みや状態に応じた入院準備を整えることができていた。外科系の 4 病棟とも、それぞれ入院準備に向けたケアを実施し、その患者に応じた入院前から退院までの関わりを事例で振り返り、プロジェクト会議で報告し、共有することで、次の事例に活かすことができていた。

今後の課題は、教室から入院予定病棟へつないだ事例を重ねて、入院前から患者へ役立った良い看護の可視化を行い、看護ケアとして定着するようにしていきたい。また、教室への参加を望んでいても、家族の送迎時間などの都合や遠方で帰宅時間の都合で参加できない患者に対して、出前教室などアウトリーチ的な活動でケアを行い、入院前から準備が整えられるよう支援の幅を広げていきたいと考えている。不安を感じているのは患者だけでなく家族も同様であり、高齢化社会において、認知症患者が増加する中、患者を支える家族に役立つケアについても、教室のオプションとして考えていくことも必要と考えている。患者が家族と共に入院前から退院後の生活まで質を落とさず穏やかに過ごせることを今後とも目指していきたい。